２０２６年４月７日

令和８年度入学式学長告辞

九州工業大学長　安永卓生

新入生の皆さん、そしてご家族・ご親族の皆様、九州工業大学へのご入学、誠におめでとうございます。

春の温かさに包まれたこの佳き日に、皆さんをここ記念講堂に迎え、入学式を挙行できますことを、教職員一同、心より嬉しく思います。

九州工業大学は 1909 年、私立明治専門学校として誕生し、1921 年に官立へと移行し、その後、現在の国立大学としての歩みを続けてきました。今年で 117 年目となります。東京帝国大学などで総長を務め、本学の初代総長でもある山川健次郎氏が開学の際に「技術に堪能なる士君子」の養成を本学の理念・精神として宣言しました。単なる技術者の育成にとどまらず、道義心を備え社会全体への貢献を目指す人材育成を意味しています。本学の教育・研究の根幹には、今もこの精神が脈々と息づいています。また、当時の建物は、東京駅や日本銀行本店の設計で知られる辰野金吾氏によるものです。現在では、正門とその横にある守衛所だけになっていますが、近代化産業遺産として登録されています。正門には当時最先端の技術であった鉱滓煉瓦（こうさいれんが）造ブロックが使われています。

そして、本日、皆さんが集っているこの記念講堂は、本学開学 50 周年事業として 1959 年に建設されました。折板（せっぱん）構造が特徴の、扇の形の建物で、日本を代表する建築家の清家清氏の設計です。当時から、今に至るまで、本学が最先端を走り続けてきたことを示す一例です。

このように九州工業大学は、ただ単に人が集まる場所ではなく、問いが生まれ、考えがぶつかり合い、次の時代を切り拓き、その精神を次の世代へと更新してきた場所です。言い換えれば、九州工業大学は、皆さんが「完成した答え」を聞きに来る場所ではなく、「まだ名前のついていない問い」を持ち帰る場所といえます。

ここで、皆さんに一つ問いを投げかけます。先ほど触れました本学の建学の理念にある「技術に堪能である」とは、いま、どんな状態を指すでしょうか。

少し身近な例で考えてみます。皆さんは、スマートフォンの地図アプリを使ったことがあるでしょうか。目的地を入力すれば、最短ルートを一瞬で示してくれます。とても便利で、今日も使ってこられた方がいるかもしれません。しかし、もしも、

目的地そのものが間違っていたら、本当は別の場所に行くべきだったら、どうでしょうか。どんなに優れたナビも、「どこへ行くか」は決めてくれません。

生成AIも、同じです。大量の情報を集め、答えらしきものを示すことは得意です。しかし、何を目指すのか、何を大切にするのか、何を問題だと考えるのか、これらは、人が決めるしかありません。

だからこそ、これからの学びで重要なのは、「答えを速く、正確に出す力」だけではなく、自ら責任を引きうける覚悟をもって「問いを立てる力」です。

大学での学びを、あえてゲームに例えてみましょう。高校までは、ルールだけではなく、ゴールも決まっているステージが多いゲームであったといえます。しかし大学は、「ルールを理解しながら、自分でミッションを設定するゲーム」、たとえば、マインクラフトのようなゲームです。何を目指すのか、どこまで掘るのか、どこで社会とつなぐのか、これらは、みなさん自身が決めることになります。是非、九州工業大学という大学を十二分に使い倒してください。国内、海外を含めて、大学、企業などとの接続の機会もたくさん提供しています。

九州工業大学は、「社会実装」を重視し、多様な他者と交わることでイノベーションを創出することを目指している大学です。研究室の中だけで完結せず、現実の社会という“実装環境”に出ていく学びを大切にしています。それは、「シミュレーションだけで終わらない」学びとも言えます。うまく動くはずだった設計が、現場では通用しない、思ったより人は動いてくれない、データ通りに社会は反応しない、ここに、学びの本番があります。是非、その試行錯誤そのものを楽しんで下さい。

ここで、皆さんにもう一つ問いを投げかけます。「失敗とは、本当に“失敗”でしょうか。」自転車に初めて乗れた日のことを思い出してください。最初から一度も転ばずに乗れた人は、ほとんどいないはずです。転んだ経験があるからこそ、バランスの崩れ方、危ない瞬間、立て直し方などが身体に残り、自転車にのることが実現へと繋がります。学びも、同じです。転ばないことより、「転び方を知っていること」のほうが、長い目で見ると重要になります。

このキャンパスは、年齢・国籍・文化・職業など多様な人々が行き交う場です。そして、多様な人と出会い、繋がる機会が数多くあります。考え方も価値観も、得意とすることも異なります。そんなとき、ぜひこう問いかけてみてください。「自分

は、何を“当たり前”だと思っていたのだろう。」その違和感は、まちがいではありません。自分自身を更新しようとしているサインです。

最後に、皆さんにお願いがあります。大学生活を通して、ぜひこの「問い」を持ち続けてください。「自分は、どんな技術者・研究者、あるいは社会の創造者になりたいのか。」「この技術を、何のために、誰のために使いたいのか。」答えは、何度変わっても構いません。むしろ、時代や環境に応じて、変わることが自然かもしれません。

この記念講堂から始まる皆さんの世界が、問いを立て、試し、書き換えながら進む世界となることを願い、また、その挑戦と調整を支援し続ける大学であることを誓い、告辞といたします。

本日は、誠におめでとうございます。